

◇「建築を考える」(2012年、ペーター・ツムトア著、鈴木仁子訳、みすず書房)

建築はデザインの側面、構造的側面、施工の側面などから説明することが可能と思われませんが、優れた建築については、そのような側面だけでは十分に理解することは出来ないと思われまます。感動的なその建築をどのような人がどのような感性、価値観で設計したのかは大変興味深く、それゆえにその建築家のことを知りたくなるのは自然な心の動きと思います。建築を理解するうえで、その建築を設計した建築家からアプローチするのは、建築を身近に理解するうえで、かなり有効な手法と思います。そのような意味で、世界的に評価の高い建築家のことをあまり知らない学生さんが多く見受けられるのは少し気になります。

建築家書いた文章は難解な言葉を用いて心象風景を芸術的に記述していることが多いのか、「わかりにくい」と不評な場合が多いのですが、そのようなことが原因の一つかもしれません。

ここに紹介する本はペーター・ツムトアの講演原稿を集めたもので、話すための原稿であるせいか、大変わかりやすく、ツムトアの建築に対する思いが素直に伝わってきます。ペーター・ツムトアは日本の建築ジャーナルの世界ではピーター・ズントーとして紹介されていますが、本人の母語であるドイツ語の発音では、ペーター・ツムトアの方が近いそうです。優れた翻訳とツムトアの建築同様抑制のきいたブックデザインはあたかもツムトアの珠玉のエッセイ集のようでもあります。10本の講演原稿で構成されており、それぞれはそれほど長文ではないので、コーヒーでも飲みながらゆったりと読むのに適していそうです。建築を学び始めたばかりの学生の皆さんには、「建築を教える、建築を学ぶ」の項が特におすすめです。